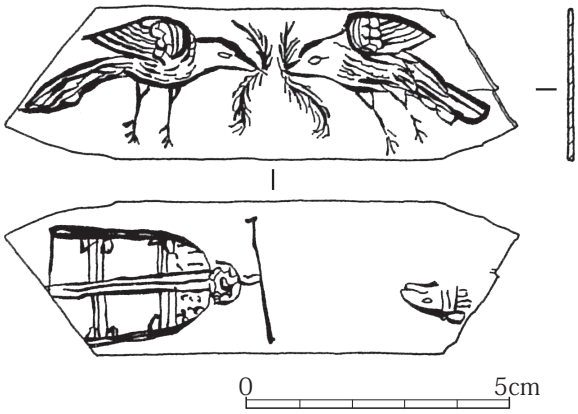
絵画薄板（花喰鳥）

「絵画薄板（花喰鳥）」は長岡京市開田４丁目で出土しました。厚さ１㎜以下の薄い木の板に「松のような枝をくわえた鳥」が対で描かれており、裏面には鐘や亀の絵の一部が見られることからデザイン帳を切り取って作られたものと考えられます。

「花喰鳥」の文様は、古代ペルシアで好まれた「葡萄の小枝をくわえ真珠の首飾りをつけた鳥」の文様が起源とされており、シルクロード周辺の文化に触れ華やかに変化しながら天平時代の日本列島へもたらされました。そして「花喰鳥」から派生した文様が平安時代の中頃に「松喰鶴」の文様として成立します。長岡京から出土したこの絵は、国風の意匠へ再構成される段階のものと思われます。

▲ 裏面には鐘と亀と見られる絵が描かれている



▲ 絵画薄板が出土した六条条間小路升状部（西から）

▲ 升状部内部の様子　軟らかく粘りのある腐葉土の中から木簡などの木製遺物とともに見つかった

長岡京市埋蔵文化財センター設立 40 周年記念事業・2022 缶バッジプレゼント企画